

2023年5月10日

第10回エクセレントNPO大賞 「市民賞」講評

1. 審査の視点

DXといわれるデジタルトランスフォーメーションの適正な活用による、社会課題解決が盛んに言われている中、市民一人一人が、社会の課題に遭遇した時に、どのようにその課題を解決に導いていくのか、大きな時代の過渡期に私たちはいます。市民一人一人が、安心して自分の価値観を発言したり、対話したりできる場所から、組織としてのミッション達成に向かって活動し、違いを違いとして認めあいながらも、困難を抱える人々の課題解決に向かうことが重要です。

市民とは何か、市民性とは何か、が、NPOに限らずあらゆる組織で問われていると感じています。NPOという組織における市民とは何か？市民性とは何かについても問い続け、考え続ける必要があると思います。

そのような問いがあることを理解した上で、このエクセレントNPOでは市民性を、広く市民の社会参加の意識をどう高め、どう受け入れているかという問いに置き替え、明示的にはボランティア受け入れに関する4項目と寄付受け入れに関する1項目の審査員評価を基本に審査しています。

審査員評価は、提出された5項目の自己評価をベースに、同時に提出された「組織のストーリー」とWebサイトの内容を参照することによって補足・修正したものです。その結果をもとに、審査委員が一同に会して議論を重ね、疑問点を確認しながら、ノミネート団体や市民賞を決定してきました。

2. 審査結果

(1) ノミネート団体

以上のような経過を経て、下記の5つの団体が「市民賞」にノミネートされ、その中から1つの団体が「市民賞」に決定しました。

① 特定非営利活動法人「エイズ孤児支援 NGO・PLAS」

4 回目の応募となる「エイズ孤児支援 NGO・PLAS」は、2005 年に設立し、コアメンバーが学生時代に立ち上げた団体を様々なライフステージを乗り越えながら、主にウガンダとケニアでエイズ孤児の支援をしています。市民性の観点では、インターンやボランティアと共に活動を行っておられます。フィードバックの機会となる「インターン面談」が現役インターンによって企画され、活動計画のなかに組み込まれています。定期的なフィードバックは、ひとりでは気づきにくい自分の強みを知り、その強みを組織が目指す成果への貢献にどう結びつけていけるかを考えるうえでとても大切です。

② 特定非営利活動法人「ユースコミュニティ」

3 回目の応募である「ユースコミュニティ」は、東京大田区内で、生活に困難を抱える家庭の居場所づくり、学習支援を 2014 年から行っている。大田区からの受託を中心ではあるが、自主事業・受託事業合わせて、13 拠点を運営。小学生から高校生まで約 300 名の子どもたちが在籍している。300 名の子どもたちの学びと居場所を支えるボランティアは約 160 名で、平均年齢は 27 歳。

「子ども自身が自ら主体的に考えていく」ことをモットーに、大人と子どもが対等に話し、本音もぶつけあえるような環境づくりに注力されています。

③ 特定非営利活動法人「ホームスタート・ジャパン」

初めてご応募いただいた「ホームスタート・ジャパン」は、イギリスが発祥の伴走型の家庭訪問子育て支援活動。イギリスでは 50 年以上の歴史がある。日本で 2009 年にこの仕組みを導入した同団体は、現在全国 31 都道府県の 115 の地域で活動を展開。これまでに約 3000 人のボランティアが養成講座を修了し、累計で 8 万回家庭に支援を届けてきました。全国共通で 37 時間もの養成講座が組まれており、有償ボランティアでなく、無償ボランティアにこだわりをもって活動を展開されています。

④ 認定特定非営利活動法人「たすけあいの会ふれあいネットまつど」

5 回目の応募となるたすけあいの会ふれあいネットまつどは、35 年間続く、地域の助けあい組織を運営。2000 年に介護保険制度ができましたが、制度だけでは抜けや漏れが出てくる豊かな地域生活において、困ったときはお互い様をモットーとして、有償ボランティアとして活動。団体として目に見える形でボランティアへのかかわりをすすめており、ボランティア説明会、新入会員の研修会、ボランティアへの 1 年目、10 年目の感謝状贈呈式など、工夫がされています。

⑤ 特定非営利活動法人「兵庫子ども支援団体」

2 回目の応募となる**兵庫子ども支援団体**は、2013 年から兵庫県明石市で、小学生から高校生を対象に学習支援や居場所づくりを行っています。中心となって立ち上げたメンバーは高校生で、自らの問題として、子どもの支援を行っています。現在も雇用している職員は居ないため、全員がボランティアとして活動しています。ボランティア参加時には法人のミッションから説明し、参加検討から実際の支援活動に至るまでにも 5 回の研修が実施されている事や、継続して活動しているボランティアにも子どもとのかかわりについて年に 1-2 回の外部講師を招いた研修も実施していることは、ボランティアとともに団体の成長を見据えた計画がなされています。

(2) 市民賞

以上 5 つのノミネート団体の中から慎重に議論を重ねた結果、特定非営利活動法人ユースコミュニティを市民賞に決定しました。市民賞の審査項目の自己評価点と審査員評価点が一致しており、審査員評価で最も高い評点が得られ、人の参加であるボランティア参加も、お金の参加となる寄附の参加においても、ユースコミュニティにかかわることが、「自らも成長できる」という実感につながる仕掛けがなされていることが、素晴らしいと感じました。

さまざまな困難を抱える子どもたちが、「市民」として成長するための、ボランティア活動であり、寄付募集活動になることを期待しています。

3. 今後に向けての期待

今回ノミネートされた5団体は、活動地域はアフリカという海外のところから、全国に活動拠点を作っている団体、特定の自治体の中でじっくりと根を下ろし活動を行っている団体と、バラエティに富んでいましたが、ボランティア参加を、大変丁寧にとらえ、団体も共に「成長」していこうとしている姿勢が表れている 5 団体だったと思います。また、活動地域は違っても、活動内容は、困難や課題を抱えている人々への支援という点で、共通をしていました。

そのような、団体として困難や課題を抱えている人々に対する団体だからこそ、ボランティアや寄付者とのコミュニケーションにおいても、一方的な支援や研修にとどまらず、対話や

フィードバック、評価をし合うという工夫がなされていました。また、コロナによる、オンライン相談や SNS の活用による利便性と、リアルコミュニケーションによる「信頼感・安心感」の醸成をうまく組み合わせた活動を行っていることは、他の団体にも参考になることが多くありました。